
パーフェクト・メモリーズ・コーポレーション

中津遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーフェクト・メモリーズ・コーポレーション

【Nコード】

N98120

【作者名】

中津遥

【あらすじ】

ドラマみたいな恋愛がしたい？

感動の家族を演出したい？

それとも億万長者になって世界を巡りたい？

奇跡だっておてのもの！

当社パーフェクト・メモリーズ・コーポレーションにお任せあれ！

何でもお望みの思い出をおつくりします！

さあ、あなたも最高の思い出、作りませんか？

お題はお話しいです。

序章

駅の改札を降りると、ロータリーには何にもなかった。寒々しいほど人気もなく、そこら中に銀杏の葉が山になって溜まっている。もう秋もずいぶんすぎてしまった。

足元に絡まる黄色の葉をガサガサと無意識に山を蹴散らし、薄汚れた自分のスニーカーを見てはつと固まり、ちよつと恥ずかしくなつて慌てて山から離れた。マフラーに半分顔をうずめながら、ちつと舌打ちをする。

小学生か、俺は。

学ランのポケットに手をつ込み、黙々と歩きはじめた。

空は暗雲に包まれ、今にも泣き出しそうだった。

駅からうねうねと続く住宅街と道路を十五分ほど歩いたところに、公園がある。

4丁目公園、とさび付いた看板が見えてきて、それを通り越して公園を突っ切った反対側に、クリスマス一色です、と言わんばかりのライトで飾り立てた家がある。どこから買ってきたのか、2階からでかいライトのツリーが光り、味気ない門前には笑えるほどサンタクロースが並べてある。表札は木製で、佐々木と書いてある。ポストには何も入っていないかった。

ひらひらとなびくモールで飾られた門を開け、猫の額ほどの庭と駐車場を数歩歩いて、玄関に辿り着いた。鍵は開いている。

「ただいま！」

開け放ったドアの向こうに、叫ぶ。

一瞬、ざわつと空気の振動を感じたように思ったけど、すぐにかき消されてしまった。

廊下の奥から小走りに出てきた中年の女性と男性、背の高い少年によつて。

「おかえり。」

「おかえりなさい。」

「…おかえり。」

3人の顔にそれぞれ一瞬戸惑いや驚きがよぎったが、すぐにほつとしたように笑った。

「ただいま、母さん、父さん。アニキ、大学は？またサボりかよ。」

「ばか、お前と一緒にすんな。今日は…半ドンだ。」

「はあ？マジかよーずりーな！。」

苦笑交じりに兄さんは笑った。マジだよ、ばーかと言われ、早く上がらなさい、と母さんが笑った。

父さんの顔もニコニコとしている。最も、父さんは顔の造りが「ニコニコ」だから変化がないといつてもいい。

台所には、何故か切りかけのキャベツの千切りが山になって残されていた。隣には手をつけてやめてしまったかのように、半分だけつぶされたジャガイモがやはりボウルの中で山になっている。

今日はコロツケなのか？

鞆を肩から下ろしながら、何か菓子みたいなもんはないかな、と思わずきよろきよろとした。実はとんでもなく腹がすいている。

「お菓子なら居間にあるわよ。でもすぐにご飯作るわね。勇太、何か食べたいものある？」

「えー？別になんでもいいよ。でもチョコハラへったから、超特急で！」

「はいはい。…今日は剣道、良太君に勝てたの？」

「…また負けたよ。」

唇を尖らせ、そっぽを向く。思わず父さんが声を出して笑った。

「あらあら。」

「良太君は背が高いからなあ。」

「俺だってすぐ伸びるよ！もう14だし、成長期だし、アニキだって160あるし。だろ！？」

居間の方に座り、テレビを見始めたアニキに向かって声をかけると、
「フン、と鼻息が聞こえた。」

「お前、牛乳嫌いだからもう伸びねーよ。」

「飲んでるよ！…学校で。」

「学校だけだろ。家でも飲めよ。いっぱい買ってあんだから。」

「だってさーまっずいじゃん。牛の乳だぜ？牛！」

うえつと舌を出す。また、フンと鼻で笑われた。

ちえ！いいさ、今にアニキを越して見下ろしてやる。そんでまいりましたって言わせてやる。

暖かい部屋に入ったせいか、無意識に学ランを脱ごうとして、結局
思い直してかばんをとった。

「俺、着替えてくる。」

ソファを立つと、また空気が揺れたように感じた。父さんのニコニコがちよつとだけ固まり、母さんが怒ったようにさつとふり向いて俺の腕を掴んだ。

「わっ…！」

「あ…。」

「な、なんだよ。びっくりしたなーもー。何？」

「え？ええ、いいえ、何でもないわごめんなさい。何だか、勇太が急に…背が伸びた感じがして。」

「えっ！マジ！？わっやべ、ちよつ、測ってこないと！アニキ、メジャーどこだっけ！？」

大急ぎで居間に駆け込み、引き出しをひっくり返した。何故か大量の爪切りを見つけて、次の引き出しを開けた。兄貴がめんどくさそうにソファから立ち上がり、引き出しをあちこちあけて回る俺を

見下ろした。

「知るかよ。1mmだろーせ。1mm。」

「んなことないって2cmくらい伸びてるってきつと！いいからメジャー探すの手伝えって！確かこないだ測った時どっかの引き出しにしまったんだよなー。」

「そっちの引き出しじゃなかったか？つか伸びてねえって絶対。つい先週測っただろーが。」

「いや、きつと伸びてる！」

ガツポーズと共に、俺はアニキの方を向いた。それを見て、ダメだこいつ、という風にアニキが首を振る。

「はー…とりあえずお前、着替えてこいって。制服でうろろろすんなよ、ジャマクせー。」

「うつせー。まー、そだな、メジャーヨロシク！」

「誰が探すかばかやるーが。」

再びソファーに座ってしまった兄貴にかばんを振りかざすまねをして居間を出た。階段を上がると、部屋が階段を中心に、右に一部屋、左に二部屋ある。

左方の奥が俺の部屋だ。

扉には鍵が掛けられるようになっていて、鞆のポケットから鍵を取り出して開けた。開けると同時に鞆をベッドの方へ放り投げる。

鞆にはいろいろ入っているの、いつも重たすぎる。

部屋にはごちゃごちゃと雑誌やら服やら、CDやらが並んでいる。

片付けないといけないが、微塵もやる気はしない。

MDコンポのスイッチを入れると、ラジオから軽快なロックが流れてきた。知らない曲だけど、いい感じた。

学ランをベッドに放って、筆筒を引いた。中身もちろんぐちゃぐちゃだ。大体は母さんがしまっけれど、出かけるたびに出したり入れたりするのですぐにぐちゃぐちゃになる。適当な服を引っ張り出して、適当に着込んだ。突然クシャミが出た。なんだか部屋も服もほこりっぽい。

空気を入れ替えようとして窓を開けると、先ほど突っ切った公園が見えた。公園も銀杏だらけで、まっ黄色だ。もみじだったらまだ良いのと思う。

銀杏の黄色は明るいくせにどこか寂しげで暗いから、嫌いだ。空は先刻よりも晴れて、雲が千切れていた。星が一つだけ見える。星座には詳しくないから、よく判らない。

ああ、雨は降らないのか、降れば良かったのになと思った。

「おい、メシ、できたぞお。」

間延びした父さんの声で、我に返った。随分長い間ぼんやりしてたらしい。

「今行くー！」

慌ててコンポのスイッチを切り、駆け下りる。良い匂いが漂ってきた。

おお、旨そうな匂いだ！

たまらず腹が音を立てる。

「わーすっげーごちそうじゃん！」

「さあ、並べて頂戴。今日は頑張ったのよ、母さん。」

「啓太、テレビなんか消して、こっちにきて手伝ってくれ。」

「はいはい、今行ってくて。」

かったるそうにアニキが立ち上がり、父さんからサラダを受け取った。

テーブルには和洋折衷のご馳走が並ぶ。炊き込みご飯に味噌汁、ポテトサラダ、鶏肉の香草焼き、山盛りのエビフライとコロツケ、野菜たっぷりのコンソメスープ、キュウリとナスの漬物にてんこ盛りのシュウマイ、サイコロステーキ、マグロとサーモンの刺身、などなど。

「こんなに食えないよ、母さん。」

「食える食える、いただきまーす！」

アニキが眉を寄せていう。母さんは笑いながら、そうねえ、と曖昧に誤魔化した。父さんはまあいいじゃないか、とニコニコを広げた。食事は楽しい。どれもこれも、とても美味しかった。流石に全部食べ切れなかったが、最後のエビフライはアニキから奪って食べた。コロッケは逃した。シュウマイは残ってしまい、父さんは明日の弁当に入れてくれ、と母さんに言っただけでニコニコした。

風呂から上がり、髪の毛からパタパタと水を飛び散らしながら階段を上ろうとしたら、上からじつとアニキがこつちを見ていた。廊下の電気をつけていないせいで、ひどく怒っているように見える。

「な、なんだよ。髪ならこれからちゃんと拭くって。」
無言だ。

ただ、じつと見ている。

「なんだよ！俺が先に風呂はいつでもいいって言ったじゃんか、いーだろ別に。」

神経質そうな目が、無言で何か別のものを見ている。流石に気分が悪くなって、わざとシカトして通り過ぎ、部屋に戻ろうとした。

「……………なのか？」

「え？」

扉を手を触れたまま、振り向く。今度は、今にも泣きそうな顔をしたらアニキを見つけた。

「は、え、なに……？聞こえなかった。」

「いや……いや、何でもない。水、後で拭けよ。」

「そんなん、その内乾くだろ。なんだよ、もう。」

また何かを言おうとしたアニキをよそに、部屋に入った。

それこそ、「知るかよ」だ。

ラジオは流行りのポップミュージックに変わってしまった。

耳元でピーピーと機械音がしている。

目覚まし時計だと気がつくまで、かなり時間が掛かった。まだ全然眠い。かといって寝こけている場合でもないの、仕方なく布団からずるずると這い出した。

「おはよー。」

パジャマのまま下に降りると、既に朝飯を終えた父さんと母さんが居た。二人ともギクツとしたように離れ、ぎこちない笑顔を見せた。

「おはよう。」

「おはよう、勇太。ほら、顔洗ってきなさい、頭、酷いわよ。」

鏡の中で、黒いライオンが眉を寄せた。鼻が一つ、目が二つ、眉も二つで、口は一つ。あまりパツとしない顔で、染めたこともない黒髪がこれでもかと跳ね返っている。

ドライヤーで昨日、乾かせばよかった。密かに後悔したが、どうせ今日は学校は休みだ。

居間に戻ると、既に朝飯が用意されつつあった。

「アニキは？」

「まだ寝てるんじゃないかしら？最近お寝坊なのよね、おにいちゃん。」

「ふーん。あ、目玉焼き俺、固焼きね。」

「はいはい、わかってますよ。」

テレビのニュースはいつも通り不幸を叫んでいる。今一番のニュースは、俳優が覚せい剤を使用し交通事故を起こしてしまった事件だ。俳優の家の周りに、蟻が沢山群がっている映像が流れていた。ニュースがそれを報道してすぐ、父さんにチャンネルを変えられてしまい、お天気お姉さんが寒い中外でクリスマス特集を始めてしまった。九時を漸くすぎたころ、アニキが起きてきた。徹夜でもしたのか、

目が酷くしょぼついている。いい気味だ。

寝ぼけた兄貴はそのままバスルームへと消えていった。ニユースをぼんやり見ていた俺に、雑誌をめくっていた父さんが唐突に話しかけた。

「なあ、勇太、どこか遊びに行きたいところとかないか？ 久々に皆でどこか行こうかと父さん考えてたんだが、いいところがないかなってなあ。」

「皆つて、家族で？ 俺もアニキももうそんな年じゃないっしょ。行きたいとこなんてないよー、別に。」

「そういわずに、な？ というか、父さん最近運動不足でなあ、この間の健康診断のとき、運動しなさいって先生に言われちゃったんだよ。父さんに付き合うと思って、な？」

「えー…じゃーアニキの行きたいとこでいーかなー。」

「え？」

突然話題を振られたアニキは、目玉焼きをご飯に載せたまま振り向いた。そのまましようゆをぶっかけ、食べ始める。アニキの目玉焼きの食べ方に関しては、絶対俺はナンセンスだと思う。熟々卵だしあれじゃ、黄身が流れて勿体無いじゃないか！

そもそも、卵かけご飯なのか目玉焼きなのか、全く分からない。どっちかにすればいいのに。

結局、その日は散々父さんにほだされ、母さんに頼まれ、遊園地なんぞに来てしまった。

それもこれも、アニキの所為である。アニキがあの後、新しいテーマパークがどうのこうの、と言い出したのがいけない。

まあ、いいけど。嫌いじゃないし。

問題は、えらくはしゃいでしまった父さんだ。

「お、ジェットコースターだぞ、勇太！ 父さんと乗るか？」

「え、いやだよ、父さん一人で乗れよ」

「おいおい、怖いのか？あんなのすぐだぞ、すぐ。あ、そうだ啓太も乗るか？」

「え？！お、俺はいいよ！」

ぎよつとしてアニキは後ずさった。既に笑顔が引き攣っている。

俺はここぞとばかりにアニキに食いついた。

「はっはーん、アニキは嫌いだもんなージェットコースター！ほら、小学生のとき父さんと乗って、大泣きしたじゃん？おかあさあああん！こわいよおお！！」

「うるさい！あ、あんなもん、怖いわけないだろ！」

「へー、ほー、んじゃ、乗ろうぜ」

「い、いや勇太。父さんと乗れよ。俺は母さんと…。」

有無を言わず、兄貴の腕を取って券売機に並ぶ父さんの背中を追う。

「おーとーさーん！アニキも乗るってーっ！三人分買ってー！」

「おお、そうか！啓太も乗るか！よーっし！」

父さんは無類のジェットコースター好きだ。遊園地に行けば、とりあえずはジェットコースター類を網羅する。

よって、俺とアニキは最終的に4回連続でジェットコースターに乗らされた。さすがの俺もこれはきつい。まだジェットコースターしか乗ってないのに、ぐったりしてしまった。同じくぐったりしたアニキの魂はベンチの肉体からどこかへ飛んでいってしまった。

うーん、南無阿弥陀仏。

上機嫌な母さんは、早速弁当を広げている。父さんが一番上機嫌かもしれないけど。

「ほら、おにいちゃん。お茶よ。しっかりなさいな。」

「う……。」

「啓太は情けないなあ！あれぐらい、男の子だったら慣れないと彼女が出来ないぞ？」

「いや…父さん、流石に4回連続で乗るのは…。」

「勇太もか！ダメだなあ、二人とも。勇太も剣道をやるんだったら、もつと鍛えなきゃいかん、鍛えなきゃ。」

「お父さんったら、ジェットコースターと剣道はあんまり関係ないでしょ。」

「ん？いやいや、精神の問題だよ、お母さん。」

「いやいや、精神の問題でもないし。」

その前に俺は十分すぎるほど鍛え上げてる。

弁当の中身も、昨夜に負けず豪華だった。サンドウィッチは卵とハム、シーチキン、ジャムとあり、おかずにはから揚げに、昨日のポテトサラダ、プチトマト、煮物など、詰めれるだけ詰めたようだった。まったく料理好きにもほどがある。

といっても、腹に入るだけ食べたことに変わりはないが。

昼をすぎて、再び元気を取り戻した俺たちは子供のようにしゃぎまわって遊んだ。

いい年して、母さんはメリーゴーランドに乗り、アニキはゴーカートで俺を負かして得意げに笑った。父さんはコーヒークップで酔って、ぐったりしていた。ジェットコースターは大丈夫なのに、と俺が茶化すと、遠心力がどうのこうの、と苦しい言い訳をしていた。

俺は上下に揺れて廻り続ける飛行機のようなものになり、アニキと一緒に遊覧船に乗った。鏡の館に入り、母さんだけ出てこれずに大慌てした。のんびりしている母さんだけ置き去りになったのだ。恐怖の館ではアニキが半泣きになって走って逃げた。怖いものにとことん弱いのは実にアニキらしい。

家族全員で乗った観覧車は狭く、それ故に寒さが紛らわせた。俺が面白がって揺らすと、父さんとアニキが青い顔をして叫んだので、

母さんと一緒になって笑った。

空は一面晴れ渡り、俺たちを祝福しているように輝いている。

やがて夕焼けが空を染め上げ、閉館のチャイムが静かなメロディーとともに響いた。

遊園地のゲートを抜けると、途端に皆無口になった。

寒い北風が勢い良く俺たちの間をかけていく。母さんは俺の手をぎゅっと握り締め、父さんとアニキはそんな俺たちを間に挟んでいる。まるで、決して逃がさないとしてもいっかのように。

ゲートの前には、大きな真っ黒いバンが一台止まっていた。駐車違反だろうと思ったが、誰も咎める様子はない。すらりとした黒スーツに黒コートの青年が一人、ぼつんと車に寄りかかっている。なびくタバコの煙がまるで亡霊のように青年を包んでいた。

それを見て、母さんが取り乱した。握られた手が痛い。

「勇太！行っちゃダメ、勇太！」

「母さん、落ち着くんだ。母さん、母さん。」

父さんは母さんの肩を抱いて、背中を擦った。嗚咽をこぼし、泣き始めた母さんを見ながら、俺はすると母さんの手を離し、一人足を進めた。ゆっくり前を歩いていたアニキが、突然背を返して俺の肩を掴んだ。

何かを言いかけ、苦しそうに睨みつけるアニキの顔を、俺は無表情で見つめ返した。

「…どうして！何でなんだ！なんでお前が…っ！」

「痛いよ、アニキ」

「…！」

アニキはまた泣きそうな顔をしていた。今にも崩れて大声で泣きそうな顔をして、俺を見つめた。
俺はそつとその手を自分の肩から下ろし、横をすり抜けた。後ろでがくつと膝をつく音と気配を感じたけれど、俺は立ち止まらなかった。

スーツの青年は俺が近くに来ると、煙草をもみ消してそのまま俺の代わりに家族の方へ歩いていった。
俺はとまらないで、そのまま車の助手席に乗り込んだ。閉じた窓の向こうでは、母さんの泣きわめく高い声と父さんの怒った顔が何かを叫んでいた。少し離れた所で、地面に崩れたアニキが震えていた。ちゃんと怒った顔もできるんだ、と思った。

しばらくすると家族は全員黙り込み、スーツの青年が差し出した紙に父さんがサインをした。
満足げに青年は頷き、父さんの肩を叩いて何かを言い、こちらへ歩いてきて、運転席に乗り込んだ。

青年とともに黒いバンに乗りながら、高速道路をかつとばす。
青年はまたタバコを吸っている。俺は頭に張り付いたゴムをべりべりと剥がしながら、「アニキ」は遊園地にまた行けるのだろうか、と考えていた。

「今回は随分スムーズだったな。えーと勇太君？」
「ちやかすなよ、トイズ。それより収穫は？」

「セッティング通り千だ。まあまあじゃないか？一日ぼつきりなら、うまい方だった。値切られもせず、突っ込まれもせず、ちっと怒鳴られただけで」

「ふん、一千万じゃすぐに消えちまうよ。」

トイズから一本タバコをくすねると、やっと息をついた。

「でも今回の仕事はちよろかっただろう。フィットとそう人相も体格も変わらずで。あの家族もかわいそうだったよなあ、まさかヤク中の芸能人にかまれるとはさ。まあ、これでふんぎりもついたらあんな不幸な事故なんか忘れてよ、奥さんずいぶん若かったし、もう一人くらいがんばれるだろうさ。」

「また下ネタかよ。んで、次は」

「下ネタってなー、僕は今すごく良い事を……まあ、いい。次はー、えー、一週間で百六十億、場所は東京光ヶ丘、年は17で高校生、しかも豪邸だぞ！使用人が20人で、家族構成が……おい、フィット、ちゃんとマスクを脱げよ、気持ち悪い。開始時刻は明日16時だ」
「うわっ休憩なしかよ！あーもー信じらんねえ！！俺には休息も与えられないってか！」

「それが終わったらバカンスに連れて行ってあげるよ。あつたかいところがいいだろ。東北は寒かったなー」

「冬なんてこんなもんだ。はーあ！早くバカンスに行きたいぜ」

年が明けたらバカンスにいける。

俺は早くも暑い太陽の砂浜へと思いをはせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9812o/>

パーフェクト・メモリーズ・コーポレーション

2010年11月18日03時31分発行